2021.07.01

新型コロナ・ウィルス（2）

小嶋祥三

6 月 10 日にコロナ・ワクチンの 1 回目の接種をした。そして、今日 2 回目の接種をした。1 回目の時は、翌日に注射のあとが痛んだが、3 日目には痛みは消えた。2 回目の接種で、半数以上の人は翌日にだるく感じるそうだ。わたしも多分そうなるだろうが、今のところは問題ない。

前回は、私権の大幅な制限なしに、新型コロナを克服することの難しさを行動理論で考えてみた。ではどうすればいいのか、先ず、強化の遅延の問題である。10 日から 2 週間前の行動が、現在の感染者数に関係していることを明確にするのが基本である。それにはどうするか。これまでテレビ番組で、人出（人流や飲食）の変化と、感染者数の変化を同時に示した図を見たことがない（年中テレビを観ているわけではないが）。もし、飲食を含む人の動きが感染者数と関係するのならば、時間軸を 10 日から 2 週間ずらせば、人出と感染者数の高まりは一致するはずだ。両者の関係がはっきりと理解できるだろう。それを見た人は外出を控えるかもしれない。

次に、目の前の小さな報酬と、時間的に先の大きな報酬の選択の問題、すなわち、delay discounting を緩和する工夫である。それにはどのようなものがあるか。基本は遠い大きな報酬の価値を高め、近い小さな報酬の価値を低めることである。20 歳代、30 歳代の感染者が多いので、彼らをターゲットに考えないといけない。しかし、彼らの中には感染しても大したことにはならないと思っている者がいるようなので、危機感は薄く、難しい。わたしは若い人たちと交流がないので、残念ながら、よい考えが浮かばない。目の前の小さな報酬に負の要素を加え、例えば、会食や飲酒で感染し家族にうつしてしまうということが考えられるか。遠い大きな報酬については、外国の成功事例を紹介して、その価値を高めるといったことが思い浮かぶが、月並みだ。